第一章　阮籍「詠懐詩」にみる時間の特質

―「一日復一夕、一夕復一朝」を中心として

はじめに

本章では、阮籍「詠懐詩」に詠われた時間に主眼を置く。

ただし、時間というとただちに「人生 朝露の如し」を思い浮かべるが、この章で扱うのはそれではないことを確認しておきたい。「人生 朝露の如し」とは、周知のとおり、人が生きる時間をその短さから捉えた表現である。朝露のイメージと人の儚さとが結び付いた「薤露」（『楽府詩集』巻二十七）を淵源とするといわれる。

薤上露　　薤の上の露
何易晞　　何ぞ晞き易し
露晞明朝更復落　　露晞けば明朝　更て復た落つ
人死一去何時歸　　人死して一たび去れば何の時にか帰らん

「薤露」における「朝露」は、一瞬のうちに儚く消えるが、翌日に再び現れるものとして描かれる。それは、いったん消えてしまえば生き返ることのない人間と対になっている。しかし、これに続く詩歌の中で、「薤露」に詠まれたような幾度となく再生する「朝露」の姿は捨象され、朝日が昇ればたちまち乾いてしまう「朝」の「露」としてのはかなさのみが取り上げられていく。例えば、「長歌行」（『文選』巻二十七）「青青たり園中の葵、朝露 行日に晞く」あるいは、「古詩十九首」其十三（『文選』巻二十九）「浩浩として陰陽は移り、年命 朝露の如し」などがある。いずれも時間の短さを朝日が昇る前の葉に結ぶ一粒の露に擬えたものである。

これに対し、時間を滔々と流れるその様相において捉えた表現がある。時間は生命と密接に関わっており、それらが綯い交ぜになった形で表現されることが多い。そうした表現から、時間のみを抽出し注視していくと、ひとまず次の二つに分け捉えるこ

とができるように思う。すなわち、人間が向き合う時間の全体を見渡した上で長短といった量に焦点を当てた表現、そして流れゆくというその動きに焦点を当てた表現である。

「詠懐詩」においても時間はこの両様から詠われている。「朝露 太陽を待つ（其三十五）」のように、既存の表現（「朝露」）を踏襲した句も多く見られる。本章で取り上げるのは、「詠懐詩」において初めてみる表現である。新しい表現は、作品に独特な色彩を与えているように思う。

具体的には、阮籍「詠懐詩」其三十三、其三十四である。其三十三の冒頭四句を挙げよう。なお、其三十四もほぼ同じ表現を用いる。

一日復一夕　一日復一夕
一夕復一朝　一夕復一朝
顔色改平常　顔色平常を改め
精神自損消　精神自ら損消す

喚起されるのは、「日」「夕」「朝」を刻んで流れる時間である。そして更に喚起されるのは、目の前を流れさるその一瞬一瞬に立ち会う主人公の姿である。戸倉英美氏はこの四句を挙げ、「刻一刻すべてが滅びに近づいていくという感覚、またそれを見すえる視線の強さには、他に類のないものがある」と述べる[一]。

「一日復一夕、一夕復一朝」は「詠懐詩」に見られる独特な時間表現である。往々にして詠み手の独自の世界観が下支えとなって、新しい表現は創出されるものである。しかし、氏は表現の特殊性を感覚的に捉えながらも、なぜそのような印象が齎されるのか、言葉を換えれば、表現に独特な感覚をまとわせる元となったその背後にある意識、認識について十分に触れていないように思う。

本章では、「詠懐詩」の表現に写し取られたそれまでとは異なる時間意識、時間認識に関心を置く。また、「詠懐詩」において独自であったこの表現が、次の時代になると漸次に類型化し、一つの表現パターンとなっていくことにも注目し、詩歌における表現の類型と個性の一端を明らかにするとともに、たとえば鍾嶸によって「其の源は小雅より出づ」と位置付けられたように、阮籍詩が孤立した存在として意識される所以についても言及できればと考える。

一、無窮の流れ

時間の流れを詠うとき、同じ表現あるいは似たような表現が用いられてきた。例を挙げよう。

「古董桃行」
（『文選』巻二十二沈約「宿東園」「飛光忽我遒」句の李善注に引かれた断句）
年命冉冉我遒　　年命（ねんめい）冉冉（ぜんぜん）として我（われ）に遒（せま）る

曹操「却東西門行」（『楽府詩集』巻三十七）
冉冉老將至　　冉冉（ぜんぜん）として老（お）いの将（まさ）に至（いた）らんとす
何時反故鄉　　何（いず）れの時（とき）にか故郷（こきょう）に反（かえ）らん

司馬彪「贈山濤」（『文選』巻二十四）
冉冉三光馳　　冉冉（ぜんぜん）として三光（さんこう）馳（は）せ
逝者一何速　　逝（ゆ）く者（もの）一（いつ）に何（なん）ぞ速（すみ）やかなる

「古董桃行」「却東西門行」は楽府、司馬彪「贈山濤」は詩に分類される作品である。多くの作品を通じて「冉冉」が用いられている。「冉冉」が喚起するのは、継続する事物（「我」「老」「三光」）の変化と、その背後に流れる時間である。

表現のパターン化は、当時において普遍的な現象であるが[二]、特に時間の流れを喚起する表現にこの傾向が強いように思われる。以下このことについて見ていく。合わせて時間意識、時間認識も確認していく。

『詩経』唐風「葛生」に、「夏の日、冬の日、百歳の後、其の居に帰らん（夏之日、冬之日、百歳之後、歸于其居）」とある。夏と冬が循環する中、死を迎えることが詠われる。しかし、時間の流失あるいは死に対する焦燥や恐怖といったものは、表現からはっきりとは感じ取れない。

『詩経』とともに中国文学の先頭に位置づけられているもう一つの作品集『楚辞』では、時間に対し敏感であり、表現にも富んでいる[三]。「離騒」を挙げよう。

日月忽其不淹　　日月（じつげつ）忽（こつ）として其（そ）れ淹（ひさ）しからず

春與秋其代序　　春と秋 其れ 代に序づ
惟草木之零落兮　　草木の零落を惟い
恐美人之遲暮　　美人の遲暮ならんことを恐る

太陽と月、春と秋、『詩経』と同じように規則正しく巡る自然のリズムに時間を重ねる。「離騒」では、「忽」という文字が見え、時間に追われ生きる焦慮が感じ取られる。「草木」「美人」の変化、それを齎す時間の進行は、「恐」れの対象としてここではっきりと意識される。

先に言及した「冉冉」、「忽忽」という語も「離騒」見える。

老冉冉兮將至兮　　老いの冉冉として其れ将に至らんとす
恐脩名之不立　　脩名の立たざるを恐る

ここでは「脩名」を立てるより先に「老」いることが案じられる。王逸が「冉冉は、行く貌」と注をつけたように、喚起されるのは迫りくる「老」と、流れる時間である（先に挙げた「冉冉」を用いた諸作品の先蹤となろう）。

朝發軔於蒼梧兮　　朝に軔を蒼梧に発し
夕余至乎縣圃　　夕べに余 県圃に至る
欲少留此靈瑣兮　　少か此の霊瑣に留まらんと欲するも
日忽忽其將暮　　日 忽忽として其れ将に暮れんとす

朝は「蒼梧」、夕は「県圃」と天界を移動する。「霊瑣〔飾りが施されている門〕」のところで束の間留まりたいと願うも、時間の余裕が残されていないことに気付く。西に傾く太陽は、「忽」を重ねた「忽忽」によって形容され、移りゆく時間の速さが印象づけられる。

「忽」「冉冉」「忽忽」は、いずれも時間の流れる速さをクローズアップして捉えた表現である。それが好ましくない状態としての「零落」「老」「暮」に向かう速さと重なり、緊張感を作品に加える。

『詩経』に詠われた時間は、「夏の日、冬の日」と、規則正しく巡る季節によって保証された流れである。人はこうした時間に身を委ね、死を「百歳の後」と見すえながら、いまを生きる存在として詠われる。時間及び生命に対する緩やかな把握が、『詩

経』に感じる穏やかさを作っている。

「離騒」は『詩経』のようにゆったりと構えたものではない。先へ先へと流れる速さに焦点が当てられ、時間に追い立てられ生きる焦慮が詠出されている。

ただ、作品の成立時期及び育まれた地域の相異を超えて、『詩経』「離騒」から共有された時間把握が見出されるのである。「夏の日、冬の日」、「春と秋 其れ代に序づ」、「冉冉」、「忽忽」から時間のみを抽出し、そこに写し取られた時間のあり方に目を向ければ、途切れることなく過去から現在、そして未来へと向かう一本の連続した流れが輪郭を現す。

『詩経』「離騒」において、思い描かれた時間は決して特殊なものではない。表現に無意識に写し取られた時間に対する普遍的な認識といえよう（円を描くか真っすぐに伸びるのかという違いはあるが、滞りのない流れであるという意味において、一本と表現した）。

「古詩十九首（漢末の成立）」を挙げよう四。

「古詩十九首」其一

（前略）

相去日已遠　相去ること日に已に遠く
衣帶日已緩　衣帶 日に已に緩し
浮雲蔽白日　浮雲 白日を蔽い
遊子不顧反　遊子 反るを 顧ず
思君令人老　君を思いて人をして老いしむ
歲月忽已晚　歲月 忽として已に晚し
弃捐勿復道　弃捐して復 道う勿れ
努力加餐飯　努力して餐飯を加えよ

夫は家を離れ、妻は残された空房を守る、いわば遊子思婦をテーマとする作品である。「相去ること日に已に遠く、衣帶 日に已に緩し」は、「日」とともに、変化を重ねる夫と妻の様相を詠った有名な句である。時は流れ、夫は妻から遠ざかり、家に留まる妻はやせ細っていくことを詠ったものである。「日に已に」は一日を基準として、時間の流れを捉えた表現である。滞りのない流れを形成しているという意味において、先に見た『詩経』「離騒」と同じ認識の元、時間が詠出されている（なお、「日に（趨

く)」「日に以て」が類似表現として挙げられる。いずれも「古詩」及び「古歌」と称される作品に見えるもので、当時好んで用いられたと想像される[五]。

「日」という相において流れを捉えた表現を遡っていくと、『楚辞』「惜誓」にたどり着くこととなる。

惜余年老而日衰兮　惜むらくは余 年 老いて日び衰え
歳忽忽而不反　歳 忽忽として反らざるを
（中略）
壽冉冉而日衰兮　寿 冉冉として日び衰え
固儃回而不息　固 儃回して息まず

「衰」の進行、「歳」の流失、迫りくる「寿」の状相に、「忽忽」「冉冉」とともに、「日び」を用いる。「固 儃回して息まず」と続くように、時間は無窮に流れ続けるものとして理解される。

阮籍「詠懐詩」に先行する諸作品に見られる時間表現、及び表現に現われた時間把握を改めてまとめておく。

まず、表現の継承と創出について。時間を流れにおいて捉えた表現は、決して多くない。本章の「はじめに」で言及したもう一つの視点、人が向き合う時間をその短さから捉えたものと比べてみると、差は歴然である。「朝露」の他に、「人生 幾何ぞ」「人生 百に満たず」「倏忽たること白駒の隙を過ぐるが如し」「人生 金石に非らず」「石を鑿ちて火を見るが如し」「風の中の燭」「飛鳥の枯枝に棲ぐる」というように、作品の蓄積とともに表現は多様化した。

一方、時間の流れを捉えた表現は、ここに挙げた『詩経』『楚辞』及び「古詩」のものによってカバーできるように思われる。日月の運行、季節の循環といった自然の営みの中に見出すもの、「忽」「冉冉」「忽忽」と進みゆく速さに着目したもの、一日（「日」）を基準として、その重なりの中に見出すもの（「日（「日已」日趨」「日以」）」）である。流れを詠う表現パターンの乏しさは、実体のないゆえ言葉として捉えることの難しさを物語っていよう。人が向き合う時間をその短さから捉えた表現は知覚される事物に擬えることで多くのバリエーションを獲得したのとは対照的である。右に挙げたいくつかの作品からも窺われるように、古い表現を踏襲しつつ、わずかな展開を見せるのみである。

次に、時間意識、時間認識について。「夏冬」「日月」、「忽」「冉冉」「忽忽」、「日（「日

已」日趨」「日以」と、異なる表現によって喚起される時間に共通性が存在する。過去、現在、未来によって構成され、それをつなぐ無窮の中に流れが認められ、人びとはこうした時間に身を置き、過去をふり返り、未来を見通した上で、現在を生きるものとして詠われているのである。

二、「一日」「一夕」「一朝」

阮籍「詠懐詩」の表現に現われた時間把握の特質を見てみよう。

其三十三の全文を挙げよう。

一日復一夕　一日 復 一夕
一夕復一朝　一夕 復 一朝
顔色改平常　顔色 平常を改め
精神自損消　精神 自ら損消す
胸中懐湯火　胸中 湯火を懐き
變化故相招　変化 故に相招く
萬事無窮極　万事 窮極無く
知謀苦不饒　知謀の饒ならざるに苦しむ
但恐須臾間　但だ恐る 須臾の間に
魂氣隨風飄　魂気 風に随いて飄るを
終身履薄冰　終身 薄冰を履む
誰知我心焦　誰か我が心の焦るるを知らん

一日が過ぎ去り、夕方がやってくる／夕方が過ぎ去り、また朝がやってくる／面影は一つに留まることなく絶えず変わっていき／精神も自ずとやつれていく／胸のうちに煮えたぎるような思いがあり／移ろいゆくことがことさらに感情を掻き立てる／万事は絶えず姿かたちを変えていき／知識やはかりごとが十分でないことが思われる／ただひたすらに恐れるのは、束の間に／魂が風に乗り、飛び去ってしまうこと／薄く張られた氷上をそっと歩くように慎重に生きる／焦げ付くような胸のうちを誰がわかってくれよう

「日」「夕」「朝」は、主人公が向き合う時間をそのまま文字にしたものである。「復」でつなげることで、三つの時間の反復による流れが出来上がる。「一」は、「日」「夕」「朝」に輪郭を与え、流れ去った無数の時間と目の前のそれとを区別し、いままさに臨んでいる瞬間（「一日」「一夕」「一朝」）に焦点を当てなおしていることを印象付ける。流れの中の現在に居合わせ続ける主人公の姿が合わせて意識されるのは、このような表現による喚起力とは無縁ではないだろう。次から次へと目に映る時間の描写は、更には流れるその速さをも写し取っている。作中の主人公が向き合う時間である。

従来の作品、例えば先に見た「離騒」「惜誓」「却東西門行」のように、「老」「衰」という文字によって抽象的に詠われてきた人間の変化は、「詠懐詩」のこの篇では「顔色」と「精神」、すなわち外面と内面の衰えとして具体的に提示される。「平常」は、今から過去に目を転じる際に見えてくるもの。そこに自ずと過去と現在の対比が出来上がる。「顔色」「精神」の変容は、他でもなく主人公が立ち会っているこの一瞬、詩の言葉を借りれば「一日」「一夕」「一朝」が契機として意識されていることになる。

「魂気　風に随いて飄る」とは、人の死を指す[六]。「須臾の間」とあるように、ここでは死は突如にやってくるものとして捉えられる。詠出されたのは、極めて不確かな生命の姿である。

目の前の一瞬を生命（「顔色」「精神」）に何らかの変化を与えるものとして意識すること、それに続く一瞬に予期せぬ終わりが訪れる可能性を見出していること、この篇に描かれたのは、「老」「死」、すなわち人が辿るであろう軌跡をあらかじめ見通すことができず、不確かな生命ゆえ、そのときどきを生きる主人公の姿である。

こうした生命の詠出に、時間をめぐる独特な認識が映し出されているように思われる。「一日復一夕、一夕復一朝」は、目の前を過ぎ行く時間をそのまま言葉として写しとったものである。しかし、ここに時間の流れが見出されるとすれば、それはあくまで過ぎ去った一瞬一瞬を繋いで出来上がる、過去における流れである。それに続くはずの、この一瞬及び次の一瞬、すなわち現在および未来を、過去の流れの延長線上に置かれるものとして、この詩の語り手は予め見出すことができないでいる。

過去から未来に向かって流れゆく連続性をもった時間としての性格の揺らぎが、未知で不確かな一瞬一瞬と向き合いながら生きる様相の詠出に繋がっているように思われる。「終身　薄冰を履む」と末尾句に吐露した生きることに向けられた慎重さと危機感は、こうした時間把握の中にあって切実な心情として胸に迫るものがある。

「詠懐詩」其八十一を挙げよう。

昔有神仙者　昔 神仙者 有り
羨門及松喬　羨門 及び 松 喬
喻習九陽間　喻習すること九 陽の間
升遐嘰雲霄　升遐して雲霄を嘰う
人生樂長久　人生 長 久を楽しみ
百年自言遼　百年 自ら遼かなると言う
白日隕隅谷　白日 隅谷に隕れ
一夕不再朝　一夕 再び朝せざるあり
豈若遺世物　豈 世物を遺れ
登明遂飄颻　登明 遂に飄颻するに若かんや

仙なる空間に生きる「神仙」と儚い人間が対比的に詠われる。冒頭四句では、時間に支配されない神仙の生活ぶりを称え、続く四句では、人間界に生きることの現実を嘆く。

後半に描出された人間界の時間が独特な流れを作っている。古来より太陽は時間と密接に関わっており、規則正しい太陽の運行は時間そのものとして見なされてきた。阮籍のこの篇では、太陽は「隅谷」に「隕」れる姿で描かれている。沈んでいく太陽は、一日の終わりを意味するが、ここでは太陽の動きによって支えられている時間そのものが閉ざされることを予感させるものとなっている。「隕」れるという太陽の描写を承け、二度と明けない「朝」が詠われる。再び日が昇り「朝」を迎えることで、時間は循環し流れゆく。「夕」と「朝」の断絶は太陽の異常な動きを示すだけでなく、太陽の動きとともに進んでいたそれまでの時間の崩壊をも意味する。

儚い生である上、極めて不確かな時間と向き合わざるを得ない。二重の意味における苦しみを引き受け生きる自覚が、最後の二句「豈に世物を遺れ、登明 遂に飄颻するに若かんや」という人間界からの逃避願望に収れんされる。

もちろん、テクスト外の現実に即せば、時間の流れに変化が起こることはありえない。日常において次の瞬間を生命の最後の一瞬と見なし生きることもないだろう。しかし、こうした緩やかな時間把握または生命把握をここに挙げた「詠懐詩」から抽出することは困難である。

其三十三と詠い興しを共有する其三十四を挙げよう。

一日復一朝　一日　復一朝
一昏復一晨　一昏　復一晨
容色改平常　容色　平常を改め
精神自飄淪　精神　自ら飄淪す
臨觴多哀楚　觴に臨みて哀楚多し
思我故時人　我が故時の人を思う
對酒不能言　酒に対いて言う能わず
悽愴懷酸辛　悽愴として酸辛を懐く
願耕東皋陽　東皋の陽に耕さんことを願うも
誰與守其眞　誰と与にか其の真を守る
愁苦在一時　愁苦　一時に在り
高行傷微身　高行　微身を傷う
曲直何所爲　曲直　何の為す所ぞ
龍蛇爲我鄰　龍蛇　我が鄰と為す

一日が過ぎ、また朝がくる／暮れ方が過ぎ、また明け方がやってくる／容相は一つに留まることなく変わっていき／精神もひとりでに尽き果てていく／さかずきを前に悲しみばかりが多く／我がこころに叶う昔え人に思いを馳せる／酒にむかい言葉も出ず／痛みに満ちた胸に辛さを抱え込む／東皋の南でのんびりと畑仕事でもしたいと願うが／誰とともにそのような「真」を守ろう／憂いと苦しみが一瞬に押し寄せ／高尚な行いは卑しい身を傷つけるばかりである／世間に合わせて調子を変えることはやめよう／とぐろを巻きじっと身を潜める龍蛇こそが私の知己なのだ。

目の前を「日」「朝」「昏」「晨」と時間が過ぎ行く様相、それと向き合う生命のあり方を詠った冒頭四句は、其三十三と同じである。八十二篇ある作品の中で、同じ詠い興しはこの二篇のみであり、極めて印象的である。同じ表現を繰り返すところに、詠み手の強い思い入れが窺われる。

第五句以降は孤独感が吐露される。憂いが募り、酒を手に「故時の人」に思いを馳せるも、かえって一人で盃を傾けているという現実に気付かされ、悲しみを深めていく様子が詠われる。先に見た其三十三では、第五句以降、「湯火を懐く」「苦しむ」「恐る」「(心が) 焦がる」と心情の吐露を重ねていくが、「誰か……知らん」と結んでい

るため、文字として表された一つ一つの感情よりも、分かち合う相手のいないゆえ生じる孤独感が印象として残る作品である。其三十三に詠われた孤独感、またそうした孤独感から遁れることのできない閉塞感は、この篇（其三十四）においても受け継がれている。「詠懐詩」群の中において、前後をなし、かつ詠い興しを同じくするこの両篇は、同じ感情をも共有していることになる。

其三十三では、主人公は同じ状況に留まり、そこに生きる苦悩を最後まで綿々とつづったものだが、それに続くこの篇では、そうした状況からの逃避が試みられる。第九句に見える「東皋の陽」は隠者が住まう世界である[七]。阮籍詩において、上世、川のほとりといった隠逸の地、神仙世界は、現世から時間的、空間的に隔たった理想の場所として捉えられている（このことについて第二章及び第三章で詳しく見ていく）。そこでの生活に思いを巡らし、逡巡した上、「龍蛇」の近くでひっそり生きよう、と詠い収める。「龍蛇」とはいうまでもなく、俗世から距離をとり、身を隠し生きる象徴である。

「一日」「一夕」「一朝」と目の前を過ぎれば、結果として、それらの時間の点は一本の流れを作っていく。現象として同じように流れを作る一瞬一瞬であっても、そのときどきを生きる主人公にとって、あらかじめ予測された時間および生命を生きるのと、予測できない不安定な一瞬一瞬に生命を曝しながら生きるのとでは、時間認識及び生命意識が異なっているということを確認するまでもないだろう。未知の一瞬一瞬と向き合いながら生きる緊迫感が、「一日復一夕」によって初めて表現し得たのである。

阮籍詩に始まるこの表現は以降踏襲され、その過程で一つの型として整えられていくこととなる。

三、後世における「一日復一夕」の展開

「一日復一夕」は以降、受け継がれていく。管見の限り、陳・沈炯の楽府「長安少年行[八]」（『楽府詩集』巻六十六）が最初である。

長安好少年　長安（ちょうあん）に好（よ）き少年（しょうねん）あり
驄馬鐵連錢　驄馬（そうば）鉄連錢（てつれんせん）〔良馬の印〕たり

陳王装脳勒　陳王　脳勒を装え
晋后鑄金鞭　晋后　金鞭を鋳る

（中略）

道邊一老翁　道の辺に一　老翁あり
顔鬢如衰蓬　顔鬢　衰蓬の如し
自言居漢世　自ら言う漢世に居り
少小見豪雄　少小にして豪雄を見ると
五侯俱拜爵　五侯　倶に爵を拜し
七貴各論功　七貴　各　功を論ず
建章通北闕　建章　北闕に通じ
複道度南宮　複道　南宮に度る
太后居長樂　太后　長楽に居り
天子出回中　天子　回中より出づ
玉輦迎飛燕　玉輦もて飛燕を迎え
金山賞鄧通　金山もて鄧通を賞す
一朝復一日　一朝　復　一日
忽見朝市空　忽として朝市の空なるを見
扶桑無復海　扶桑　復　海　無し
崑山倒向東　崑山　東に向かいて倒る
少年何假問　少年　何をか假問す
頽齢値福終　頽齢　福　終に値い
子孫冥滅盡　子孫　冥し滅び尽き
鄉閭復不同　鄉閭　復　同じからず

（後略）

素晴らしい馬具を「陳王」「晋后」のものに擬えていることから、物語背景は少なくとも晋以降と想像される。そのいまをときめく一人の少年と漢代より時代を越え数百年生きた「老翁」と出会う舞台である。「老翁」の述懐により話が展開される。長安は政治の中心であり、「五侯」「七貴」「太后」「天子」が華やかな生活を送る地であった。しかしいまでは、長安は廃墟と化し、海は干上がり、山は崩れ、子孫はみな死に、故郷は全く異なる様相をみせている、という。

過去から現在に話を転じる際に、「一朝復一日」が置かれる。目の前を過ぎ去る「一

朝」「一日」は、「少小」だった「老翁」を老いに導き、周囲の環境を変えていった。同時に、前後語られる天変地異は聞き伝えによって知り得たのではなく、「老翁」自身が経験した事実であることを読者に印象づける。

隋の盧思道「聴鳴蝉篇九」では、阮籍詩の隻句のみを襲う。

（前略）
故郷已超忽　故郷 已に超 忽にして
空庭正蕪没　空庭 正に蕪没す
一夕復一朝　一夕 復 一朝
坐見涼秋月　坐して涼 秋の月を見る
（後略）

作品全体は、蝉の哀しい鳴き声を聞き、生じた一連のこころの動きを綴っている。長い間故郷に戻れないでいることを慨嘆し、浮世で奔走する意義について思索し、最後に「帰去来、青山の下。秋菊 離離として日び把るに堪う。独り枯魚を焚き林野に宴す」と陶淵明「帰去来の辞」を踏まえ、田園生活に憧れを示す。右に引く四句は、故郷から離れた時間をふり返る部分にあたる。「一夕」「一朝」と目の前を流れ、いま秋の月を目に写しているという。異郷に身を寄せ、移り変わっていく時間をただただ見上げる主人公の姿が浮かび上がってくる。

ここに挙げた沈炯、盧思道の作品はいずれも「詠懐詩」の表現を踏襲する。ただ注意したいのは、元の阮籍詩に現れた独特な時間認識をここに見出せないことである。過去の流れから切り離されて存在する不安定な一瞬一瞬、そうした時間を生きる緊張感と緊迫感は感じ取られない。盧、沈の作品から喚起されるのは、むしろテクスト外の現実世界に即した強靭な時間の流れである。

唐代に入ると、表現が整えられていく。李白の「単父東楼、秋夜送族弟沈之秦」（『李太白全集』巻十六）を挙げよう。

（前略）
遙望長安日　遥に長安の日を望むも
不見長安人　長安の人を見ず
長安宮闕九天上　長安の宮闕 九天の上
此地曾経爲近臣　此の地 曽経 近臣と為る

一朝復一朝　　一朝 復 一朝
髪白心不改　　髪 白くして 心 改めず
屈平憔悴滞江潭　　屈平 憔悴して江潭に滞し
亭伯流離放遼海　　亭伯 流離して遼海に放る
折翮翻飛隨轉蓬　　翮を折り翻飛して転蓬に随い
聞弦虚墜下霜空　　弦を聞き虚墜して霜空に下る
聖朝久棄青雲士　　聖朝 久しく棄つ青雲の士
他日誰憐張長公　　他日 誰か憐む張長公

タイトルにあるように、族弟が秦へ赴くに際し、贈った送別の作である。前半では、惜別の情を詠う。右に挙げた後半部分は、族弟が去ったあとのことを想像し、彼の忠誠心及び才能を称え、こうした人材を左遷した朝廷へのいくばくかの非難を滲ませる。

「一朝復一朝」は、これからの時間に目を向けた表現となる。表現に変化が見られる。阮籍、沈炯、盧思道詩に見える表現を「一A復一B」型とするならば、李白のこの篇では「一A復一A」の形をとっている。文字の不均等ゆえ持ちえた個性をならし整え、「復」の前後を統一することで、踏襲しやすいシンプルな表現が完成されたということになろうか。以降、この「一A復一A」型が広く用いられるようになる。

韓愈の「与張十八同效阮歩兵〔阮籍〕一日復一夕十」を挙げよう。

一日復一日　　一日 復 一日
一朝復一朝　　一朝 復 一朝
秖見有不如　　秖だ如かざる有るを見
不見有所超　　超ゆる所 有るを見ず
（後略）

宋人の方崧卿によるの題下注が見える。

阮嗣宗〔阮籍〕「詠懐詩」百篇近し。其一六韻一首に「一日復一夕、一夕復一朝。顔色改平常、精神自損消」と云う。其一七韻一首に「一日復一朝、一昏復一晨。容色改平常、精魂自飄淪」と云う。公の詩、其の体に效いて又た之を釈して「一日復一日、一朝復一朝」と曰う。然らば其の題、実に「一日復一夕」に效うより

始まるなり。後人、詩語と題と相応ぜずを以て併せて易え「一日」の字に作るは実に非なり[十一]。

阮籍詩を引用した上で、後の人が韓愈詩の冒頭句「一日復一日」に合わせ、詩題を「效一日復一日」としたのは間違いであり、「效一日復一夕」に改めるべきであると述べる。

ここから窺われることは、韓愈の詩題が「与張十八同效阮歩兵一日復一日」で流通していたということ。「一日復一夕、一夕復一朝」「一日復一朝、一昏復一晨」と「(阮歩兵)一日復一日」、宋人の方崧卿こそは言及したものの、ほとんどの人がその差異に無頓着だったようだ。「一A復一A」型が広く浸透し、阮籍詩の表現の変化形として認識された結果ということになろうか。以降、白居易[十二]、梅堯臣[十三]、陸游[十四]なども「一A復一A」型を用いており、枚挙に暇がない。

しかしながら何度も確認するように、ここに踏襲されたのは表現のみで、阮籍詩の表現に写し取られた独特な時間意識、時間認識は受け継がれることはなかった。

おわりに

「一日復一夕、一夕復一朝」「一日復一朝、一昏復一晨」は、阮籍「詠懐詩」に初めてみる表現である。時間の流れを詠ったものである。展開の乏しい流れを捉えた表現を新たにここに詠出したということになる。新しい表現に阮籍の独特な時間把握が写し取られている。時間はいつ閉ざされるのかわからない不安定なものとして捉えられ、それまでとは異なる認識の元、時間が詠出されている。

「一日復一夕」に代表される「詠懐詩」に見られる時間は、作品に詠み込まれた生命意識と密接に関わっている。過去の流れから切り離された状態で存在する目の前の一瞬、そして新たに訪れる不確かな次の一瞬に居合わせ続ける主人公は、乱世という不安定で不確かな現実を生きる阮籍の姿に対応するものである。特殊な時代を生きる阮籍が新しい世界観を詠み出だしたのは、単なる偶然ではないように思われる。顔延之は「阮籍は晋の文〔司馬昭〕の代に在り」、鍾嶸は「顔延年〔顔延之〕の注解、其の志を言うを怯る」、李善は「嗣宗〔阮籍の字〕は身 乱朝に仕え」るというように、「詠懐詩」に阮籍が生きた時代、すなわち乱世を重ねる所以である。

もちろん「詠懐詩」において、それまでと同じような時間認識、時間意識を詠み込んだ作品は多く見出される。ただ、阮籍詩の豊かさあるいは、個性はむしろそれまでとは異なる世界観を詠出した点に他ならない。

「一日復一夕」は、その鮮やかさゆえ後世に受け継がれていく。しかし、そこに見られた時間把握は受け継がれることはなかった。しかしながら、後世の作品に用いられた表現を「一A復一B」あるいは「一A復一A」型とするならば、そこに例えば「冉冉」「忽忽」「日に已に」とは異なった表現としての魅力があることにも触れておきたい。

生命は一瞬という時間の連続である、という風に捉えることができる。「一A復一B」「一A復一A」は、現在に視点を置き、時間の流れを写し取ったものである。自らをかすめ過ぎ行く一瞬一瞬をそのまま言葉として捉えることによって、それを見据える主人公の姿が言外に喚起される。そのため、作品に書き込まれた情報は主人公の一瞬一瞬の経験として印象付けられる。後世において時間を表す新たなパターンとして浸透したのも、表現によって齎される固有の喚起力のために他ならない。

既存の表現の枠組みから離れ、独特な世界認識を写し取って新しい表現が完成された。その表現は阮籍から離れ、受け継がれていくが、その背後にある世界観は再現されることはなかった。詠み手の時間への捉え方が普遍的なものではなく、個別的なものだったことが踏襲のあり方によって追認される。

特殊な時代に身を置いた阮籍だからこそ持ち合わせていた、ある意味では他者とは共有されることのない時間把握（あるいはそこから窺われる生命把握）を詠出したことによって、阮籍詩は人びとに独特な感覚を与え、文学の歴史の中において異色の存在として一席を占めているに至ったのではないだろうか。

「序」で見たように、鍾嶸は阮籍の文学を高く評価しつつも、孤立した存在として捉えた。「一日復一夕」という時間表現を手がかりにその所以を探ろうとすれば、表現に現われた独特な世界観がまず挙げられよう。詠み手の鋭い感性が表現として結実し、その作品に独特な雰囲気を纏わせ、他とは異なる鮮やかな印象を人々に残したのだろう。

注

一『詩人たちの時空――漢賦から唐詩へ――』（平凡社選書一二〇、一九八八年）（初出は、

「漢代六朝詩における空間表現の形式とその変化――漢賦から唐詩まで――」『東洋文化研究所紀要』第一〇二冊、一九八七年）更に氏は続けて、「それにしても時間をめぐる省察はやはり漢代の古詩以来受け継いできたものである。このような詩句に基づいて、作者の思想を組み立てようとすることは、詩人阮籍の核を見失う恐れがある」と述べる。

二　鈴木修次氏はその論著『中国古代文学論』（角川書店、一九七七年）において、「古代の詩歌は、主体性を持つ、あるいは強烈な個性を持つ個人的詠嘆であろうとする方向には向かわず、むしろ、共同社会生活における一員としての、没個性的共同感情をのべようとする方向に、より強く傾く」と述べる。古代の詩歌の性格に関する指摘であるが、表現面も同じ傾向が見出される。

三　小南一郎氏は「楚辞の時間意識―九歌から離騒」（『東方学報』、五十八号、一九八六年、のち『楚辞とその注釈者たち』（朋友書店、二〇〇三年）に収められる）において、『詩経』と『楚辞』における時間認識の相異について論じられている。その上で、『楚辞』の独自性について詳細に分析する。本論では、阮籍詩に現れている時間認識の特殊性を明らかにするため、両者の時間把握の共通点に関心を置く。なお、引用の『楚辞』は全て、洪興祖補注『楚辞補注』による。

四　吉川幸次郎氏は「推移の悲哀―古詩十九首の主題―」上中下（『中国文学報』、第十冊、第十二冊、第十四冊、一九五九年、一九六〇年、一九六一年）において、「古詩十九首」に見られる「人間が時間の上に生きることを意識することによって生まれる悲哀の感情」を「推移の悲哀」を呼んだ。ここでは、時間表現とりわけ「日已」「日以」から見出される時間そのものの流れについて注目する。なお、「古詩十九首」の引用は『文選』による。

五　「日已」を含む両句の注（『文選』李善注）に、「古歌」「家を離れて日に遠くに趨き、衣帯日に緩きに趨く」が引かれる。また、同じ「古詩十九首」の其十四に「去る者は日に以て疎く、生くる者は日に以て親し」が挙げられる。「日已」「日（趨）」「日以」といずれも時間の流れを捉えるのに、「日」という時間単位に目を留めている。

六　『礼記』郊特牲「魂氣歸于天、形魄歸于地。」

七　阮籍の奏記文である「詣蔣公」（『文選』巻四十一）に「方將耕於東皐之陽、輸黍稷之税、以避當塗者之路」とある。ここでは「東皐の陽」は、高官高位に繋がる「当塗の路」と対になっており、俗世の中枢としての「当塗の路」から隔たった生活が送れる空間として意識されていることがわかる。

八　（全文）「長安好少年、驄馬鐵連錢、陳王裝腦勒、晉后鑄金鞭。歩搖如飛燕、寶劍似舒蓮。去來新市側、遨遊大道邊。道邊一老翁、顔鬢如衰蓬。自言居漢世、少小見豪雄。五侯俱拜爵、七貴各論功。建章通北闕、複道度南宮。太后居長樂、天子出回中。玉輦迎飛燕、金山賞鄧通。一朝復一日、忽見朝市空。扶桑無復海、崑山倒向東。少年何假問、頽齡值福終。子孫冥滅盡、鄉閭復不同。淚盡眼方暗、髀傷耳自聾。杖策尋遺老、歌嘯詠悲翁。遭隨各有遇、非敢訪童蒙。」

九 『芸文類聚』巻九十七「聽鳴蟬詩」（全文）「此聽悲無極。群嘶玉樹里。回噪金門側。長風送晩聲。清露供朝食。晩風朝露實多宜。秋日高鳴獨見知。輕身蔽數葉。哀鳴抱一枝。流亂罷還續。酸傷合更離。暫聽別人心即斷。才聞客子淚先垂。故鄉已超忽。空庭正蕪沒。一夕復一朝。坐見涼秋月。河流帶地從來嶮。峭路干天不可越。紅塵早弊陸生衣。明鏡空悲潘掾發。長安城里帝王州。鳴鐘列鼎自相求。西望漸臺臨太液。東瞻甲觀距龍樓。說客恒持小冠出。越使常懷寶劍游。學仙未成便尚主。尋源不見已封侯。富貴功名本多豫。繁華輕薄盡無憂。詎念嫖姚嗟木梗。誰憶田單倦土牛。歸去來。青山下。秋菊離離日堪把。獨焚枯魚宴林野。終成獨校子云書。何如還驅少游馬。」

十 （全文）「一日復一日、一朝復一朝。祇見有不如、不見有所超。食作前日味、事作前日調。不知久不死、憫憫尚誰要。富貴自縶拘、貧賤亦煎焦。俯仰未得所、一世已解鑣。譬如籠中鶴、六翮無所搖。譬如兔得蹄、安用東西跳。還看古人書、復舉前人瓢。未知所究竟、且作新詩謠。」（錢仲聯集釈『韓昌黎詩繫年集』巻十二）

十一 （原文）「阮嗣宗「詠懷詩」近百篇、其一六韻一首云、「一日復一夕、一夕復一朝。顔色改平常、精神自損消」。其一七韻一首云、「一日復一朝、一昏復一晨。容色改平常、精魂自飄淪」公詩效其體而又繹之曰「一日復一日、一朝復一朝」。然其題實自「效一日復一夕」始也。後人以詩語與題不相應、併易作一日字實非也。」

十二 『白氏長慶集』巻二十一「一日復一日、自問何留滯。為貪逐日俸、擬作歸田計。亦須隨豐約、可得無限劑。若待足始休、休官在何歳。」

十三 『宛陵集』巻四十「效阮步兵一日復一日二首」「一日復一日、一朝復一昏。來新去成故、俯仰變凉温。有貴即有賤、未若賤常存。騂牛慕孤犢、黄犬悲東門。禍福相為基、損益不復言。吾祖入吳市、應龍非伏轅」「一日復一日、一晨復一夕。四序相盛衰、三辰運光魄。下上有常理、憂患何時易。先爛泣金燃、先焚歎薪積。但願遠世網、焚爛不能責。麒麟出非時、未免西狩獲。鷗鳥浮洪波、心已預海客。」

十四 『劍南詩藁』巻三十三「自警」「人生非金石、壽夭不自知。一日復一日、亦或至耄期。方其未死間、早夜勿自欺。嗟彼陷溺者、太山起毫釐。努力戒惰偷、堯舜可庶幾。我今齒髪弊、彊健復幾時。一寸學古心、自視猶可為。雞鳴推枕起、為善亦孳孳。天定終勝人、吾世或未衰。素業果有傳、三復吾此詩。」